



2023年（令和5年）
6月号（No. 937）

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

ジャルキャ・ヒマール2023年春 私の「ヒマラヤ初見参の記」	1
支部長が代りました	4
日本山岳会の役員と事務員の関係	5
山上の「幻の湖」を訪ねて 残雪の大雪山・白雲岳に登る	6
千葉県山岳3団体で取り組む 「房総の山復興プロジェクト」	7
山岳写真家・白旗史朗展が 酒田市美術館で開催される	8
さんけん通信	9
連載 ■ ご当地アルプス登山案内	
◎ おくの細道アルプス	10
◎ 沙美アルプス	11
東西南北	13
活動報告 図書委員会	14
新入会員	16
会務報告	17
ルーム日誌	17
会員異動	17
INFORMATION	18
編集後記	19

▶ 日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月・火・木 10～20時
水・金 13～20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10～18時

ジャルキャ・ヒマール2023年春 私の「ヒマラヤ初見参の記」

北海道支部 野村良太

「北海道分水嶺積雪期単独縦断」で第27回「植村直己冒険賞」を受賞した野村良太会員が今春、ネパール・ヒマラヤのマナスル山群の最奥に位置する未踏峰ジャルキャ・ヒマールに挑んだ。残念ながら悪天候と大量降雪で初登頂はならなかったが、初めての海外渡航、初めてのヒマラヤで彼が見たもの、感じたものは……。

お坊さんの勧誘でヒマラヤへ

北海道の分水嶺670kmを積雪期に単独で63日間かけて縦走していた、あの苦難と幸福に満ちた日々から、早くも3ヶ月が経とうとしていた。北海道の短い夏を凝縮したような、良く晴れてからつと暑い8月のある日のことだった。その日はガイドの仕事で早朝から幌尻岳にいた。ツアーサポートで礼文島から駆けつけてくれた齊藤

大乗さんとは、この日が初対面だ。挨拶もそこそこに早速、大乗さんから魅力的な勧誘が始まった。

「来年の春、1ヶ月半くらい空けられない？」

「もしかして海外遠征ですか。空けます。行きます。ところで、どこですか？」

二つ返事で返す僕に、大乗さんが嬉しそうに続ける。

「ヒマラヤの未踏峰だよ。ジャル

キャ・ヒマール。標高は6473m。ネパール側から行くよ。」

後から聞いた話では、大乗さんは遠征メンバーに僕を誘うためにこの仕事を請けたらしい。僕自身も、大乗さんとは直接の面識こそないものの、花谷泰広氏が主宰する「ヒマラヤキャンプ」の2018年メンバーとしての活動を追い掛け、雑誌の記事で大乗さんの活躍ぶりを読み、礼文島に高所登山が好きなお坊さんがいることを知っていた。こんなチャンスはそう簡単には巡ってこない。迷わず参加を決めた。

秋になって、最終的に4人のメンバーが固まった。大乗さん（37）を隊長に、山梨県韮崎市で登山ガイドとして活動していて、同じくヒマラヤキャンプ2018年隊の

メンバーだった杉本龍郎さん（34）、奈良県川上村でこちらも登山ガイドとして活動する竹中雅幸（32）さん、そして僕（28）だ。竹中さんは2020年にもジャルキャ・ヒマール遠征を計画して、5400m付近で撤退を余儀なくされた遠征



ブリ・ガンダキ峡谷の岩壁を削って車道が奥地まで進む。ジャガット付近にて

隊の隊長も務めていた。

礼文島、葦崎、川上村、札幌とバラバラに活動しているメンバーはそう頻繁に集まることはできないので、遠征計画の打ち合わせは主にZoomにて行なわれた。海外、特にネパール遠征の経験豊富な先輩方に多くを教えてもらう形で、初の海外遠征となる僕も滞りなく準備を進めることができた。

年末に1週間と3月中旬にも1週間、全員でスケジュールを合わせて、八ヶ岳や上高地周辺でトレーニング合宿を行なった。出国直前には三浦ドルフィンズの低酸素室にて4500m相当の環境も体験させてもらい、体を慣らすことができた。

奥地まで進む開発の波

3月31日、ネパールの首都カトマンズは雨だった。想像していた暑くて埃っぽい喧騒はそこにはなく、ひんやりと肌寒く空気が澄んでいた。朝の散歩や食料の買い出しに出かけるたびに、異国情緒あふれる街並みに思わず頬が緩まずにはいられなかった。

4月5日、いくつかのトラブルを乗り越えバスに揺られて8時間

ようやくキャラバンのスタート地点に着いた。この先は10日間かけて最奥のサムド村を目指す。今回の遠征時点では、ジャガットという村の前後まで車が通れる道路が延びていた。ここ数年で着実に開発が進み、どんどん奥の村まで入れるようになってきているらしい。この日も岩盤にうがたれた粗削りな道を走ったが、次にこの地を訪れることがあったら、そのときはきつと見違えるほど立派な道路になっているのだろう。数十年前の日本の山岳地帯にもこんな時代があったのだろうと想像すると、なんだか感慨深いものがあつた。そういえば、カトマンズもアスファルト舗装が増えてLEDランプが点いて、ここに来るまでの車窓からは、トンネル工事が始まっているのが見えた。大自然に囲まれているのが見えた。大いに開かれていて、むしろ自然を上手く利用したいという人の力を感じ、開発の途上にある国のおいがした。ギャブではロキシという蒸留酒を飲んだ。柔らかい焼酎のような味で、運良く村で作っていたでき立てをいただいたが、これまで

飲んだどの酒よりも美味しかった。サマでは、野口健さんが建てられた小学校の校庭で年に一度の運動会の最中だった。村中の人が集まり、老若男女がだだっ広い草原でヒマラヤをバックに大盛り上がりだ。ここはすでに3500m、一緒になって走ったらあつという間に息が切れた。人生で初めて望む8000m峰、マナスルはその猫耳のような双耳峰を天高く突き上げていた。

悪天候とド力雪で撤退を決断

4月15日、サムド村を越えて4550m付近にBCを設置した。いよいよここからが本格的な登山期間だ。21日間の日程は多いようであり余裕はない。「ブジャ」という安全祈願のお祈りをして、偵察や高所順応へと行動を繰り返す。当初の計画では、ジャルキャ・ヒマールの南側に東から西へ突き上げる氷河帯を登る予定だったが、偵察の結果、もっと手前の尾根ルートからアプローチをすることに決めた。こちらの方が距離は長くなるが、比較的緩い斜面が多く、氷河を進むよりもリスクも少ないだろうという判断だった。



高地に棲むヤクとマナスル(左上)。サマ付近にて

だが、行程は思うようには進まない。季節外れの大雪がマナスル・エリアを覆い、BCでは一晩で20cm近い積雪があつた。午前中は晴れていても、午後になると一気に雲が湧き、風が強くなる、そんな日が続いた。それでもチャンスをうかがい、偵察やABC設置を済ませ、ついに山頂を目指して出発した。

4月27日、4900mのABCから尾根ルートを登り、5400m付近ではロープを出して、ピナクルを回り込むように岩稜帯を越えた。5600mより先はしばらく緩い尾根が続いていると期待していたが、見事に裏切られ、大回



全く雪のなかったBCが、一晩で銀世界に。ジャルキャ・ヒマールはこの谷の右手奥

りしての登高を余儀なくされる。この日はここで力尽き、翌日に続きを進む。

左右にクレバスが口を開けているので、ロープを結んでラッセルを4人で回す。この日の午前は快晴無風、振り返るとマナスルがどどんとそびえているのだが、肝心のジャルキャ・ヒマールは奥にあるので全く見えない。6000mを越えると頭痛がきついが、弱音を吐いている場合ではない。13時半、6270m付近でまた地図にない大きな下り斜面が出てきた。

龍郎さんが先頭で偵察に向かったが、少し行くと戻ってきてしまった。どうやら西側の斜面はほとんど雪が飛ばされて、下のブルーアイスがむき出しになっていると言ふ。段々と天候が悪化していて、この先を何m下れば良いのかも視界が利かず分からない。そのような想定をしていなかったたので、懸垂下降を繰り返すほどのロープやアイス・スクリュウの数はない。標高差で言えば山頂まであと200mだが、この先にもまだアップダウンがたくさんあるのは目に見えている。下山はやむを得ない判断だった。

BCへ戻ると翌日はまたどつさりと雪が積もった。溶けて土が見えてきていたBCも銀世界へと戻ってしまい、不安も着実に積もってゆく。

5月1日、日程的にこの先4日間くらいがラストチャンスだ。ブルーアイスは阻まれた尾根ルートは断念し、当初予定していた氷河ルートでの再チャレンジを決めた。だが、こちらもルート・ファイナンディングには困難を極め、メンバーの1人がクレバスに落ち

るアクションもあった。幸運にも無傷で、自力で登り返すことができ、事なきを得たが、ここまでも含めた不安を拭い去ることはできず、3日、4人で話し合った結果、今回の登山の撤退を決断した。

4日、またどつさりと雪が降り積もる。昨日撤退していて助かった、と胸をなでおろすほかない。今回の遠征でサードを務めてくれたこの道30年のチェトさんも、「これだけ雪の降る春のヒマラヤは記憶にない」と話していた。

上手いかないときとは、得てしてそういうものなのだろうと思う。それでいて、ふとしたときに全ての苦労を忘れさせてくれる、すばらしい時間が確かに存在する。バック・キャラバンでラルキャ・ラ(5106m)を越えた8日の朝焼けは、まさにそんなひとときだった。あの橙色に染まるヒマラヤに見とれていると、きつとまた近い将来、ここに帰ってくるのだらうなど、ぼんやりとそう思った。

「撤退」経験を次の「成功」に

帰国から3週間が過ぎ、ヒマラヤの余韻もそこそこに、大阪府豊中市の実家でこの原稿を書いている。

昨日(6月3日)は、兵庫県豊岡市にて植村直己冒険賞の授賞式と記念講演会だった。北海道分水嶺単独縦断が評価され、2月に受賞の連絡をいただいたときは、あまりに予想外の出来事にただただ驚いた。というのも、これまでの受賞者は国外での活動ばかりだったので、自分には縁のないものだと思い込んでしまっていたのだ。だからこそ、僕が登山を始めるきっかけとなった、思い入れのある北海道での活動が評価をされたことが素直に嬉しい。

このような偉大な賞を受け取り、改めて身が引き締まる想いだ。自分がやりたいことに素直に、真摯に向き合い続けること、そして、何より無事に帰ってくることに、この二点は受賞した者の務めであろうと理解している。この春のネパール遠征を通して、改めてこのことを強く感じた。

「撤退」を今後に活かすことができなければ、それは「敗退」と呼ぶべきだろう。僕はまだ、今回の遠征を敗退とは呼ばない。「あの撤退があったからこそ、この成功があるのです」そう話せる日が来るに強く信じている。

支部長が代りました

京都・滋賀支部長 笠谷茂さん

私は兵庫県西宮市出身で、1962年生まれの61歳です。山との出会いは山岳部に所属した高校時代、六甲山系をホームグラウンドとし、春と夏には北アルプスに足を運びました。山での体験とともに、山を愉しむことを体現されていた恩師に強く影響を受けました。

卒業後、室蘭工業大学に進学しワンダーフォーゲル部に所属、北海道の山々を夏は沢をたどりハイマツのヤブを漕ぎ、積雪期は登山靴でのスキーを駆使し、駆け巡りました。その後、就職先の関係で滋賀に居住することになりました。現在、近郊の山や日本アルプスをはじめ国内各地の山々を、仕事や家庭とのバランスを意識しながらいろいろな切り口(高い山、秀でた山、人跡の薄い山、歴史を感じる



京都・滋賀支部長 笠谷茂さん

山、地域性を感じる山、登った山を眺める山、島山など)で捉え、歴史、植生、動物、地質、地形、気象などに関心を持つことでモチベーションを高めながら愉しんでいます。

日本山岳会へは2016年、日本百名山にも足跡を残すことができたことが縁で、大聖寺にある「深田久弥 山の文化館」を訪れた際に出会った本会会員の方との会話を通し、山を愛する多様な人たちと接する機会があることに興味を持ち入会しました。

当支部では会員の高齢化もあり実働人数が大幅に減少しています。構造的な課題への特効薬はありません。利他の気持ちを持って諸活動に取り組むことが「楽しい」という思いを共有する機会となり、仲間が集まる。そんな輪が広がること、そして、クラブライフを楽しむ仲間が増えることを願っています。また、次代の若い人が秘め持つ可能性を信じています。

諸先輩、関係各位のご支援を賜り、微力ではありますが次代につなげられるよう、取り組みたいと思っています。よろしくお願いいたします。

宮崎支部長 日高研二さん

令和5年度通常総会で支部長として承認され、支部運営の大役を担うこととなりました。先輩諸氏が築いてこられた伝統をしっかりと引き継ぎ、支部の発展のために努めていきたいと思っています。

私は、広島カープのキャンプ地のある日南市の出身です。小学校から大学まで野球一筋で、卒業後は県庁に勤務し登山とは無縁でしたが、友人たちの中に登山の魅力を熱く語る会員の方がおり、その感化を受け、45歳で日本山岳会に入会しました。定年退職後もフルタイムの現役ですので、しばらくは山と仕事を両立させながらこなしていくつもりです。

登山歴は取り立てて言えるものはありませんが、これまで県内外の山々を登っています。宮崎には、北はユネスコ・エコパークに登録



宮崎支部長 日高研二さん

された「祖母・傾・大崩山系」や九州脊梁の山、南は霧島連山などのほか、吉田類の「につぼん百低山」としてNHKで全国放送された双石山・行藤山などすばらしい山が多くありますので、ぜひ宮崎の山々にも足を運んでください。

さて、当支部は1985年に全国20番目の支部として会員23名で発足し、2003年には、当時の大谷優支部長がNHK登山教室を担当して会員勧誘に尽力され、ピーク時には125名までに急増しましたが、現在の会員数は43名、会友21名で、平均年齢も75歳を超えています。

今後、支部を維持・存続させていくためにも会員の増強、特に若手会員などの加入促進が喫緊の課題と言えます。そのほか、支部の活性化・高齢化対応など課題は多々ありますが、支部の諸先輩や本部・各支部の指導などを仰ぎながら、会員と一体となって前向きに取り組んでいく所存です。

最後に、活動のメインはやはり「山行」だと思いますので、「事故のない安全・安心で快適な登山」を心掛け、楽しいクラブライフを目指していきたいと思っています。

DIRECTOR&CLERK

日本山岳会の役員と事務員の関係

児玉 茂

日本山岳会の歴史では、明治38(1905)年の創立時から昭和5年ごろまで、事務所を持たないまま、幹事の個人宅で事務一切を引き受けていた。創立以来ずっと事務作業を担ってきた高野鷹蔵氏が、大正8年に病気で倒れたため急遽、武田久吉氏宅で事務作業を行なうことになった。

しかし、3年後に武田氏は札幌赴任となり、高頭武氏の東京にある妹宅が事務所になったが、これも1年続かず、万策尽きて大正12年2月からは、新潟県三島郡の高頭氏の隠居所で事務を扱うことになってしまった。

東京の鳥山悌成氏宅にいったん移った後、昭和4年11月に虎ノ門のビルに間借りして、集会所兼図書室(ルーム)が設けられた。この新体制を創ったのは第二世代の横有恒、藤島敏男、松方三郎氏らである。『山岳』に加え新たに『会報』と『山日記』を発刊するなど仕事量が増えたが、この時期もまだ会の仕事作業を担ったのは役員たち自

身であり、持ち回りでそれを行なった。

会員が1000人に迫るなか、体制を更新して土台を固めるため法人格を得る努力を払った。昭和16年1月によりやく社団法人の認可が下りた。『会則』が『定款』となり、『幹事』という役職を新たに設けた。これは事務的な作業を行なう実働隊である。さらに同年3月の役員総会で、専属の事務職が置かれることが決まった。定款細則の中に会務執行に関する庶務規定があり、『第四條…前條ノ趣旨ニ依リ本會ニ主事一名ヲ置キ役員ニ変リテ會務執行ニ従事セシム 主事ハ有給トス』とある(『会報』108号)。

事務作業の執行に奮闘している。戦局逼迫のなか、昭和20年5月に虎ノ門のルームが全焼してしまふ。この緊急時に日本山岳会の命脈を必死で守ってくれたのが塚本氏で、『主なる事務は塚本主事が自宅の焼跡に天幕を張って其処で執っていた』(『会報』122号)という。会への強い思いと責任感で事務一切を引き受けてくれていた塚本氏だが昭和22年6月、再建に動き出した日本山岳会の進展を見届ける前に腸チフスで亡くなってしまう。

昭和145号(昭和24年5月)に、塚本氏の後任として会員の原全教氏が本会専任主事に就任された、と載っている。「今回同氏の就任を見たことは本会の為まことに喜ぶ。そこで遠からず事務渋滞の悪評も一掃され昔日の如く会と会員の緊密な繋りも復活されることを期待している」とある。主事の定義を辞書で引くと、「官庁・学校・自治団体などで、長官の命を受けて一定の業務を主管する人」という記載があり、塚本氏の業務内容はこれに当てはまる。原氏は役員ではなく、役員に代って一般事務を行なう立場であり、主事というより専任事務員と呼ぶのが正しそうである。

日本山岳会の定款に「役員及び職員」の規定が加えられたのは昭和29年からで、第二十一条に「職員は有給の事務員、書記または主事とし常務理事の指示により本会事務所、図書室の管理並びに文書收受発送その他日常業務に従事する。」とある。原氏以降に主事はおらず、事務員だけが常置されている。一方の役員(理事)というのは、数ある委員会を通して会員対応を含めた会務全般を統括する役割を担っている。

昭和42年、ルームが向井ビルに移ったときに図書室が確保され、初めて図書館司書が雇用された。しかし、図書管理の専任とはいかず、事務所の仕事と図書室作業を兼ねて行なうのが常態化した。また、事務員は対外的な窓口でもあり、登山情報や文献・資料の知識も要求されようが、それを求めるのは無理であり、理事が立场上その役割を果たさねばならないはずである。任期が短く交代は頻繁なために、かつてのような会務全体を把握している理事は、もういないのかもしれない。

REPORT

山上の幻の湖を訪ねて 残雪の大雪山・白雲岳に登る

北海道支部 藤木俊三

忽然と現われ、数日間で消えて、人目に触れる機会も稀……そんな幻の湖を見に行く山行を企画した。湖が現われるのは北海道・大雪山系の白雲岳(2230m)山頂直下、出現するのは5月～6月上旬の残雪期で、長くても1週間足らず。短いときは数日しか見られないと言う。

運を天に任せて日程を5月20・21日と決め、今回は山小屋を使った1泊2日の行程で層雲峡から黒

岳経由で入山した。メンバーはリーダーの私を含め7名。新緑の層雲峡からロープウェイで黒岳5合目まで上がると、そこはまだスキーもできるほど多くの雪が残っている。

アイゼンは着けず、急斜面はキックステップで慎重に登る。この日は天気が良く、ニセイカウシュツペ山や天塩岳などの眺望、間近に仰ぐ荒々しい黒岳北壁が急登の疲れを癒してくれる。出発から3

時間ちよつとで黒岳山頂に到着、主峰旭岳をはじめ北鎮岳や目指す白雲岳も指呼の間に見える。もちろん、ここからは幻の湖の有無いかんは確認できない。山頂から30分ほどで黒岳石室に到着。

1923(大正12)年の建設で、今年で100年になる道内最古の山小屋だ。中は冬に隙間から吹き込んだ雪が残り、通路の土間はドロドロ、寝場所に敷いてある銀マットも所々水たまりになっているなど、お世辞にも快適とは言えないが、雨風に当たらないだけありがたいと思うしかない。7名分の寝場所を確保して、明るいうちに夕飯を食べ早めに寝袋に入る。

翌日、朝のうちは天気が持ちそうなので午前3時起床、4時出発で白雲岳を目指す。メンバーのうち2名は小屋に残り、5名が食料など最小限の荷物を持って行動開始、残雪を利用して夏道をショートカットして進む。雪だらけで植物もまだ芽吹いていない、こんな山の上になぜか真新しい巨大なヒグマの足跡があり、少し緊張する。2時間で、幻の湖が形成される白雲岳の旧火口(白雲平)が見渡せる場所への最後の登りにかかる。

事前に「今年は雪解けが早いから、もう消えているかも……」の情報もあり期待していなかったが、傾斜がなくなつた途端、先頭の私の目に飛び込んできたのは、さざ波立つ大きな水面。

「うわーっ、湖があつたぞー」無我夢中で後続のメンバーに大声で叫んだ。湖がなければそこから引き返す予定だったが、さらに登り白雲岳山頂へ。一生に一度見られるか見られないかの景色を目に焼き付け、カメラに収めた。

この幻の湖は冬の寒さで地面の下に氷の層ができ、その氷が解けるまでの間、雪解け水が地面に浸み込まずにたまつてできると言われている。その年の雪の量、気温の推移などによつて左右され、見られる時期や期間が毎年変わるため、きれいに見えるチャンスが少ないのが幻の湖と呼ばれる所以である。

余談だが、白雲岳は大正13年に、縄文時代のもので推定される黒曜石の石器(矢じり)が多数発見された場所でもある。北海道で3番目に高く、夏は高山植物が美しい白雲岳は、幻の湖、そして古代のロマンも秘めた魅力あふれる山だ。



白雲岳山頂から見下ろした「幻の湖」の全容



湖岸に降りて、一生に一度の光景をカメラに収める

REPORT

千葉県山岳3団体で取り組み 「房総の山復興プロジェクト」

千葉支部長 松田宏也

「令和元年房総半島台風」と名付けられた台風15号は、観測史上最強クラスの勢力で房総半島の家々などに甚大な被害をもたらした。山もまたしかり、太い樹木が根こそぎ倒され、土砂崩れにより登山道は通行不能となった。

2019の年末に、千葉県の山岳3団体が集まり「房総の山復興プロジェクト」を結成したが、コロナ禍で活動は休止。2年のブランクを経て21年末に再度3団体が集まり、今後の活動の協議をしたとき、この復興活動を県内登山愛好者や一般市民に広く知ってもらうためにも、「8・11山の日」に著名登山家の講演会を開催し、その場で復興活動の紹介をしようという企画案が採択された。

著名登山家とは、日本三百名山ひと筆書きを人力のみで成し遂げた田中陽希氏。その講演会には641人も聴衆が集まり、また、新聞にも復興プロジェクトの活動が紹介され、3団体の初めての取り

組みは大成となった。

低山王国の房総は暑く、ヒルが多いため晩秋から春先までが整備期間となるが、実施に際しては手続が必要になる。倒木であつても勝手に切り整備するわけにはいかず、行政と地元の方との調整をしながら地権者への了解を得たのちに清澄山、御殿山、花嫁街道、大福山、富山、伊予ヶ岳、鋸山、人骨山、嵯峨山、房州アルプスの整備を行なった。チェンソーや鋸を使った倒木処理、土砂崩れ道のステップ切り、階段作り、トラロープ張り、道標のピンクテープ付けと、やることは多岐にわたる。

千葉県警によると、令和4年の千葉県内の山岳遭難は15件である。道迷い10件、滑落が3件、転倒と疲労が各1件となっている。房州アルプス（梨沢―鎌倉古道―大塚山―保田見峠―無実山―登山口）の大塚山付近では、滑落で2名の死者が出ている。麓の梨沢地区の成年部会から「登山者の遭難のた

びに駆り出される。安全に登山ができるようにしてほしい」との協力要請もあり、急ぎ整備に取り組むことになったが、ここで強力な助っ人が現われた。NHKラジオ「山カフェ」や「世界の車窓」のナレーター、俳優としても活躍する石丸謙二郎氏である。私が「山カフェ」に出演した縁で、登山道整備に協力をしてくれることになった。チェンソーの扱いにも慣れており、先頭に立つてテキパキと倒木処理をしてくれたお陰で、大荒れとなっていた房州アルプス一周道を開通させることができた。

整備を進めると、今まで当たり前のように歩いていた登山道は、



登山道をふさぐ倒木の処理は大仕事

山の神を祀る地元の方の手入れの恩恵に預かっていたのだと改めて思い知ることになった。通行不能であった登山道が開通すると、今までの地元の方のご苦労にほんの少しだけだが恩返しができたようで、なんとも清々しい気分を味わうことができた。全国の登山道整備が問題になっているが、山の喜びを享受している登山者一人一人が考え、行動しなければならないと実感した「房総の山復興プロジェクト」活動でもあった。

《房総の山復興プロジェクトとは、千葉県内の日本山岳・スポーツクライミング協会、勤労者山岳連盟、日本山岳会千葉支部で構成されている。》



チェンソー片手に大活躍の石丸謙二郎さん

REPORT

山岳写真家・白簾史朗展が
酒田市美術館で開催される

常務理事 萩原浩司

本会会員でもあった山岳写真界の巨匠、白簾史朗がこの世を去って4年。生誕90周年を迎えた今年4月29日から6月25日にかけて、山形県の酒田市美術館で没後初の作品展が「心に山ありて幸いなり」と題して開催された。

父親が旧・八幡町(現・酒田市)出身だったということもあり、鳥海山を「父の山」と呼び、撮影のために何度も足を運んでいた白簾に



デビュー作から海外の山々まで114点が飾られた



ギャラリー・トークとして作品解説をする筆者

とつて思い出深い地での開催である。白簾について今更紹介することもあるが、1933年2月23日、山梨県大月市に生まれ、18歳で「富士山の写真家」として知られる岡田紅陽に弟子入り。厳しい徒弟制度のなかで苦勞して写真を学び、1962年にプロの山岳写真家として独立している。

以後、南アルプスや尾瀬をホームグラウンドとして精力的に作品

を発表、さらに富士山や北アルプスにも活動域を広げ、高山植物などもその撮影対象に加わった。そして、本格的な海外取材はヨーロッパ・アルプスだった。1978年に豪華写真集『THE ALPS』を刊行して海外で評判を呼び、同書は7ヶ国で出版されている。

アルプスに続いてネパール・ヒマラヤやカラコルム、カナディアン・ロッキーなどの出版が続き、その著作は140冊を超えている。これらの業績は海外でも高く評価され、2000年には、世界の山岳文化において顕著な活躍をした個人・団体に贈られる「キング・アルバートI世功労勲章」を授与されている。これは、白簾の作品が国内はもとより世界に認められた証である。

*

鳥海山を望む広大な敷地に建てられた美術館では、下積み時代に撮影されたバレエの舞台写真から山岳雑誌に初めて掲載された思い出の1枚「ケルンの夜明け」、そして、ヨーロッパ・アルプスやヒマラヤなどの世界の名峰、南アルプスや富士山、尾瀬などの日本の山、さらに高山植物や動物など計11

4点もの作品が展示され、白簾史朗の写真家としての軌跡を追いつながら作品の全貌を堪能できる構成となっている。

開催期間中には関連イベントが開催された。カナディアン・ロッキーの撮影行に同行された益田幸郎氏(本会会員)、三百名山ひと筆書きの旅のなかで、コロナ禍のため酒田市に長期滞在された田中陽希氏、北アルプス・燕山荘の社長で、父の代から白簾氏と親交のあった赤沼健至氏らの講演会のほか、鳥海山・飛鳥ジオパーク推進協議会の大野希一氏による、写真を見ながら地球の成り立ちを解説するイベントなども実施された。さらに「白簾番」として長年、『山と溪谷』誌での連載や写真集の編集に携わった筆者が、展示作品について1点ずつ解説するギャラリー・トークなども行なわれた。

なお、酒田市美術館に近接する土門拳記念館では、両館の連携企画として7月13日から9月12日まで「田淵行男と白簾史朗―山岳写真の追求者たち―」が開催される。この夏、鳥海山に登られた折には、ぜひ立ち寄られてみてはいかがだろうか。

さんけん通信

上高地で樹木ウォッチングを

山研管理人 山田和人

5月末、上高地は早春から初夏への衣替えが進んでいます。遊歩道の端には綺麗なお花たちが次々と咲き、夏鳥たちの囀りも盛んになります。先日のTVニュースでも、ニリンソウを見に来ましたというハイカーが映っていました。今回の「さんけん通信」では、あまり目立つことのない、でも、しっかりと上高地の自然風景を支えている樹木について簡単に紹介してみます。

*

4月22日の開所作業時には、山研の北側窓から白い奥穂・ジャンダルムが、そして、東側バルコニーに立つと梓川の流れが見えてい



絡まり合うダケカンバとコメツガ



大きく枝を広げたイチイの大本

ましたが、今は広葉樹の新緑に覆われてほとんど見ることができません。再びジャンダルムが見えるのは、葉が落ちる10月末です。山研が建っているのは善六沢の扇状地の上で、東側と北側はハルニレ、サワグルミ、梓川に近付くとダケカンバ、ハンノキ、ヤナギなどの落葉広葉樹が、比較的明るい森をつくっています。南側・西側は暗い常緑針葉樹となり、この森は西穂・奥穂・前穂・明神岳へと広がっています。イチイ、ウラジロモミ、シラビソ、コメツガなど、年間を通して姿を変えることのない安定した森です。

*

山研を出て明神池に向かう梓川右岸歩道は、針葉樹と広葉樹が入り混じった森(針広混交林)となっています。河童橋から続くこの右岸歩道沿いでは、少し変わった樹々の光景が見られます。写真のようにいくつかの樹種がくっつき合い、絡まり合いながら立っています。仲良く場所をシェアしているようにも見えますが、これは成長の過程で光を奪い合いながら、相手を圧倒しようと大喧嘩を続けている様なのです。

植物は、一度根を下ろした場所から動くことはできません。そして、光を浴びないと枯れてしまいます。樹種によって成長の速さには差があり、また必要な光の量も違います。ダケカンバに代表される成長の速い広葉樹は、先行している周りの樹より少しでも幹を伸ばして光を取ろうとします。一方で成長の遅いシラビソやコメツガは、枝を広げて後からやって来た相手の成長を妨げようとしています。そのような樹々が3つ4つと絡まり合い、何十

年も闘い続けた結果なのです。

*

山研から岳沢湿原までの遊歩道沿いには、針葉樹の中でも特に成長の遅いイチイが数多く見られますが、ここでは先に見たような複数樹種による争いの光景ではなく、イチイだけが大きく枝を広げて堂々としています。樹高はそれほど高くありません。ここでは争いがなかったわけではなく、イチイが最終的な勝者として、もはや他者の侵入を許さない確固たる地位を固めているのです。急いで高くなる必要はありません。過去にどんな争いがあったのか、想像してみてもいいでしょう。ヒントは、イチイが弱い光でも枯れることなく遅い成長を続けられること。針葉樹には珍しく落葉する樹がカラマツ(落葉松)です。河童橋付近は人工林ですが、梓川沿いには右岸・左岸ともに天然のカラマツも多く、針葉樹ですが成長が早くてハンノキなどと同じ土俵で森を形成していきます。巨木の天然カラマツについては、またの機会に山研に泊まって、樹木ウォッチングをしてみませんか。

(森林インストラクター)

連載■ご当地アルプス登山案内35

おくの細道アルプス

岡山県の南東部、瀬戸内市に「おくのほそ道」と「アルプス」を一度に満喫できる場所がある。邑久町おくの里山を巡る小道で、眼下に千町せんちやう平野の田園風景が広がる「おくの細道アルプス」だ。

戦国大名、宇喜多直家誕生の地である砥石城跡への登山口から砥石山の山頂へツツジの小道を抜け、最高峰のダンガメ山（無常山、185m）を経由して大雄山（175m）からの眺望を楽しみ、城跡に下山する周遊コースである。上り610m、下り609m、総距離9.7kmで、地元の方々によって整備されており、とても歩きやすい道

になっている。

関西支部 深澤優子

【コースガイド】

岡山駅からJR赤穂線で邑久駅に到着、県道を進み岡山ブルーラインを抜けると、左方向に砥石城跡のある砥石山が見える。千町川に架けられた大橋を渡ると、正面に砥石城跡入り口がある。「本丸まで15分」と書かれた看板があり、矢印に従って登る。登山口のそばには「宇喜多直家生誕の地」の碑がある。

本丸のあった場所に着くと視界が開け、邑久の町が見渡せる。野面積みの石垣沿いに歩くと笠松神社に着く。鳥居を越えたあたりから「躑躅の小径」と名付けられた小道を南へ進む。花の時期にはツツジのトンネルになる、と案内

板に書かれている。ツツジやヤブシ、バイマツが茂る尾根道を歩いて行くと、「あすなろ坂」と名付けられた、キャンプ場からの道と交差する。数分歩くと松山に着く。山頂の桜の木には鳥の巣箱が取り付けられている。

あちこちに手入れされたヤマザクラやリョウブがある中を歩くとダンガメ山に到着する。岡山市との境に位置し、木々の間から児島湾大橋が見える。尾根道を東に歩いて長谷峠を通り過ぎ、雄久山を通過する。ここより眼鏡池を目指し南へ歩くと、「高雄山登山口」と書かれた石碑に出会う。高雄山（166m）山頂近くに鐘楼のある弘法寺があり、ひと息入ると良い。西側に展望所があり、振り返ると今まで歩いた道を見渡せる。

これより北東に進むと、坪相峠の大杉に出会う。このあたりに湿地池があり、「落羽松の森」と名付けられている。ラクウショウとは、秋になると羽状の葉が枝ごと落下するのがその名の由来で、松の仲間ではなく杉の仲間。別名「ヌマスギ」とも言う。

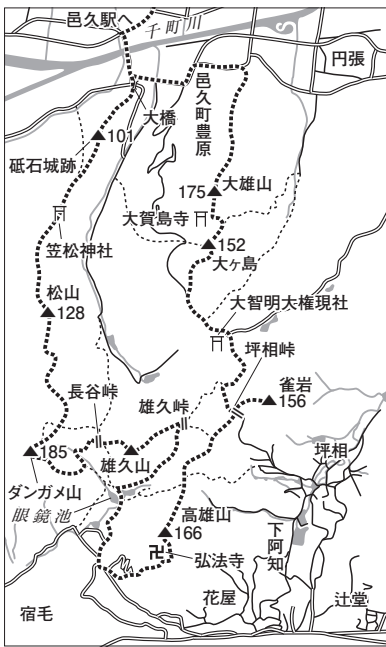
峠を東に進むと雀岩に着く。雀が羽を広げたような形に見える。



解説板が立つ砥石城本丸跡は好展望台

峠まで戻り、ヤマザクラがちらほら咲く尾根道を北に歩くと大智明大権現社に着き、なんとも愛嬌のある仏様が出迎えてくださる。大山の山岳信仰と修験道が融合した神仏習合の神であり、地藏菩薩を本地仏とするお寺で、牛馬の神様として祀られている。

権現社をさらに上ると、宇喜多氏の庇護を受けた菩提寺である大賀島寺となり、宇喜多家の供養塔がある。このあたりが大雄山の山頂となるようだ。供養塔の先にある見晴らしの良い大雄山アサギ平展望台で休憩する。北方は熊野山系、南方は小豆島あたりまで見渡せる。北西には「備前富士」と呼ば



なる、と案内

れる芥子山けしこが見える。空気が澄んでいれば、はるか大山まで見えるという。

アザギ平の北東部より降り口があり、ここは猫の鼻登山道と名付けられている。麓からだ猫の鼻のように突き出て見えるというのが由来だという。落ち葉が大量に積もっていて、たまに岩盤や小石がゴロゴロした所もある。この道を出発点とするコースもある。猫の鼻を西に下り、出発地点へと下山する。

地元の有志が山の所有者から承諾を受け整備を続けているそうで、標識が充実しており、興味深い名前が付けられた小道の続く、非常に歩きやすいコースである。ツツ



落羽松の森を抜けてアルプス縦走路は続く

ジヤヤマザクラの花の咲く時期に歩いてみたいものだ。

【コースタイム】 JR 赤穂線 邑久駅(20分) 砥石城跡入り口(25分) 笠松神社(25分) 松山(25分) ダンガメ山(25分) 長谷峠(25分) 雄久山(5分) 雄久峠(5分) 高雄山(50分) 坪相峠(20分) 雀岩(10分) 大智明大権現社(45分) 大雄山(30分) 砥石城跡入り口(20分) 邑久駅

【入・下山口へのアクセス】電車

の場合、JR岡山駅より赤穂線に乗り替え邑久駅へ。駅より20分ほど歩き千町川を渡ると、砥石城跡登山口に到着する。車の場合、岡山ブルーラインの瀬戸内インターチェンジから南へ約500mの畠山製菓が目印。ここで「おくの細道アルプス」の地図が配布されている。

参考文献：

【地圖】

地理院
2万

5000分の

1 地形图
西

大寺」朝日

新聞デジタル

2020年

6月

連載■ご当地アルプス登山案内 36

「日本アルプス」とは、本州の中部地方にある飛騨山脈・木曽山脈・赤石山脈の総称である。明治14（1881）に刊行された『日本案内』の中で、飛騨山脈を調査したイギリス人鉱山技師のウィリアム・ガウランドが、ヨーロッパのアルプス山脈にちなんで、そこから見える山脈や周辺を含めて「日本アルプス」と紹介したのが、この名前の由来と言われている。のちに小島鳥水が飛騨山脈を「北アルプス」、木曽山脈を「中央アルプス」、赤石山脈を「南アルプス」とした。

ご当地アルプスは、日本アルプス以外の各地方にある小規模なアルプスが多く、日本列島の各所で同様な景観を「○○アルプス」と呼ぶようになったことは想像に難くない。また、周囲を海に囲まれていることもあって、海上アルプス・洋上アルプスなどの呼称もある。さらには、太平洋側には「観海アルプス」と呼んでもおかしくない景観を呈している「ご当地アルプス」も多い。沙美アルプスもそんな「観

関西支部 重廣恒夫
海アルプス」の一つである。

【コースガイド】

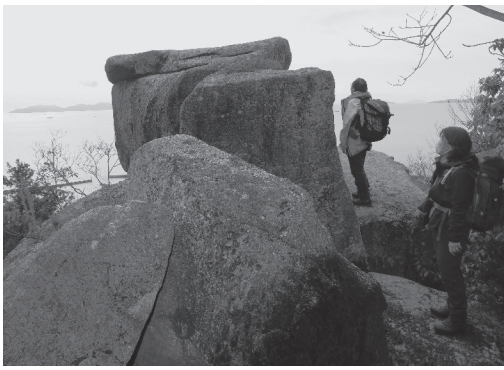
沙美アルプスは、倉敷市玉島黒崎から浅口市寄島^{より島}まで標高1000(300mクラスの山々が連なる山並みで、南側には「日本の渚百選」にも選ばれている美しい沙美



海岸が広がり、「備南アルプス」とも呼ばれている。

黒崎公園南側の登山口から奥のブドウ畑の柵に取り付けられた「備南アルプス縦走路」の道標を右手に見て（左手のコンクリートの道に入らないように）竹林道を進む。登山口から30分ほどで四等三角点・沙美（174m）に至り、手前の「弁慶岩」という道標に従って南に下ると、眼下に沙美海岸や沙美漁港を見下ろす弁慶岩の巨岩に突き当たる。

縦走路に戻って西に下ると、すぐに沙美峠である。峠から竹林に付けられた登山道（沙美アルプスは中国電力の「玉島火力線」と「玉



眼下に瀬戸内の海を見下ろす弁慶岩の展望スポット

島・笠岡線」という2本の送電線巡視路を活用している）の急登となるが、すぐに稜線に出る。振り返ると三角点・沙美の奥（東側）に水島工業地帯を見ることができ、標高点191m（沙美西ピーク？）から再び下りとなるが、南には四国の山々の展望もあり飽きることはない。

湿地帯や谷を過ぎ、No.19 鉄塔を過ぎて妙見宮に立ち寄り、竜王宮展望台（東や南の展望はもとより、北は金光の街並みと遠く遥照山（405m）を眺めることができる）を経由して、佐方竜王山（二等三角点、231m）に到達する。竜王宮分岐から竜王山まで2本の登路があるので、地図でしっかり確認したい。

頂上から少し北に下り西進して県道を横断し、南浦峠を経て（峠から北へ50m下り、左手の縦走路に入る）稜線を進めば南浦ピーク（184m）の南に位置するたんど山（147m）の分岐、さらに浦峠、百畳岩への分岐を経て軽部山（四等三角点・奥ノ原、200m）を通過して安倉峠に下る。

西側のロープの張られた作業所の奥にある「寄島竜王山安倉峠登

山口」の道標を確認して、さらに西進すると登山道に岩塊が目立つようになる。巨岩の上に立てば真下に寄島漁港が見下ろされ、瀬戸内海に点在する島々や遠く四国山地を望むことができ、「観海アルプス」を実感する。

最後の急登で寄島（鴨方）竜王山（三等三角点・西六条、289m）に到達する。頂上には2つの石の祠が鎮座している。頂上からはさらに西に縦走路が延びており、山頂には「備南アルプスはこちらから西がおもしろい」「ここから東が楽しい」と書かれた道標が立ち、縦走意欲をそそる。

ここでは山頂から北の山王峠を経て向月登山口に下るコースを案内する。寄島竜王山山頂からは福井山（175m）の分岐を経てNo.25の鉄塔を経由して山王峠に下る。送電線巡視路沿いの道を北西にたどるが、途中、No.33鉄塔への巡視路（こちらの方が道が良い）に入りやすいが、鉄塔を過ぎると道は途絶する。

ここは左に下る道を忠実に下り、向月登山口に降り立つ。登山口から鴨方駅まで2kmほどの距離であるが、タクシーを呼ぶこともでき



軽部山付近から見た沙美アルプスの岩塊群。左端は御嶽山

る。

【コースタイム】JR山陽本線金光駅（1時間20分）黒崎公園（30分）沙美峠（1時間20分）佐方龍王山（30分）南浦峠（50分）軽部山（1時間30分）寄島（鴨方）龍王山（20分）山王峠（30分）向月登山口（40分）鴨方駅

【交通アクセス】金光駅から黒崎公園登山口までタクシー利用が便利（2000円くらい）

【参考地図・資料】『新岡山の山100選』（吉備人出版）『遥照山・御嶽山・沙美アルプス登山詳細図』（吉備人出版）国土地理院2万5000分の1地形図「玉島」「寄島」「笠岡」

東西南北

N

S

上高地での田村剛〔後編〕

牛丸 工

1921年は大正10年である。『国立公園候補地調査概要』の記述と一致するのである。概要書に他人の姿を掲載するはずはなく、調査をしている責任者本人を登場させることが一般常識で、本人が写っているのである。この写真撮影は21（大正10）年6月であろう（前号12ページ右写真）。

それでも、6月の何日ころかと疑問が生じたが、古い新聞記事に関連していることが書いてあった。東京日日新聞の佐藤記者が田村剛博士の上高地視察に同行して、白骨温泉に滞在して記事を書き、21年6月16日から25日まで7回の連載をしている。少なくとも6月13日に松本まで行き、14日に東京に戻り、15日に記事を上げて16日の

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

文章は長々と解説があるが、顔写真は無い。やっと見つけた田村剛の写真は論文の挿絵にあったもので、画質が悪く、いかにもコピーという感じの代物である。

『国立公園候補地調査概要』に田代池の写真と穂高連峰を背景にした河童橋の写真もある。この河童橋、同じく大正10年6月の撮影かと早とちりしてしまいそうであるが、よくよく見ると、岳沢付近および山肌に残雪が何も見当たらないから、6月であるはずがない。8月以降秋までの風景であるから、大正10年6月ではあり得ない。しかし、河童橋は初代吊り橋で、架設期間は明治43年から昭和4年であるから、この期間に撮影されたことには間違いない（前号12ページ左写真）。

新たな資料を発掘した。上高地には国有林管理のための営林署施設があり、施設の前、またはその近場で通行する者の名簿を取っていたようで『大正拾壹年度登山芳名簿』と表紙に書かれた帳面が残されている。その中、大正11年8月23日のところに、

「本年も亦来た上高地

林学博士 田村剛」

と、筆書きで記載されている。公式には大正10年6月に調査で上高地に来ているわけであるが、なぜか連続して上高地に来た。〆ほか〇〇と連名もないので、おそらく仕事でなく私的にやって来たのであろう。

それゆえ、田代池の写真は大正10年か、11年か判断に困ってしまふことになる。よくよく考えてみれば、公式調査の大正10年撮影の方が、打倒だと思える。そして、残雪の形からしても、河童橋の写真は田村が大正11年8月23日前後に撮影したものと考えられる。

牧野富太郎と日本山岳会

小原 茂延

牧野富太郎の生誕160年を記念して、高知新聞は2022年4月24日（日）の紙面2ページを使って報じた。1面に山桜の標本を全面に、もう1面に「植物に感謝しなさい。植物がなければ人間は生きられません。植物を愛すれば、世界中から争いがなくなるでしょう。牧野富太郎」とある。牧野富太郎のことは少年のころからその名をよく聞き知っていたのと、植物図鑑

や生態を書いた本を多少読んでいたので、その容貌まですぐ思い浮かぶ植物学者である。

ご承知のように、日本山岳会の創立自体が植物や昆虫を主に研究する東京府立一中（現・日比谷高校）の学生を主なメンバーとした「日本博物学同志会」の支会である「山岳会」として誕生している。したがって、会員に自然愛好者の多かったことは当然であり、発起人として名を連ねた武田久吉、高野鷹藏、梅澤親光、河田（山川）黙らは博物学同志会の主要メンバーであった。そのような関係もあって創立時の会員には博物学関係の入会者は多く、『山岳』初期の掲載にも植物や蝶に関するものが多く見受けられ、雑録などには、「この会は山岳会なのか植物同好会なのか」といった投書などによる反発もあったと記憶している。

発起人の多くが若年者であったので、社会的な信用を得るために相応の人として、弁護士であり東京弁護士会の副会長ほか歴任の城数馬を武田久吉が旧知であったことから誘い、発起人になったが、城も山草会の主要メンバーで植物に關しては新種を発見したり、同好

の名士（子爵など）も多く山岳会に紹介している。

牧野富太郎が加藤泰秋子爵（加藤泰安の祖父・伊予の元大洲藩主）と利尻山に植物採集行を共にしたのは明治36年8月のことで、その後同38年には岩手県の早池峰山に東京帝大理科大学植物学教室の田中貢一や盛岡高等農林学校の山田玄太郎、沢田兼吉および子爵秘書の三瀬直衛らと登山をしており、このとき加藤子爵がナデシコ科の一種を発見、牧野富太郎がカトウハコベと命名したりしている。

牧野富太郎の入会は『山岳』第二年第一号付録の「山岳會々則及會員名簿」によれば238番目に位置し、すぐ前が同じ植物学者で名誉会員となった白井光太郎博士である。もっとも、この創立間もないころは会員番号は与えていないが418人の名が数えられる。その後いったん入会したもの、会費その他の理由で退会していく者も多かったようであるが、大正9年になって正式に会員番号を与えられた。そんな経緯もあってか入会時よりかなり番号が若返っている。ただ発起人に名を連ねず、入会も遅かった岡野金次郎の場合な

どは、第二年第一号の記載では62番と見做されるものの、小島鳥水が米国に赴任した大正4年からほとんどなく退会しているの、正規の番号は有していないと考えられる会員もいる。もっとも、岡野金次郎は目立つことを忌避し、個人として登山を愉しむことを良しとしたので、平塚の顕彰碑にしても遺族は金次郎翁の遺志から固辞した経緯がある。ちなみに白井博士の会員番号は名誉会員簿でNo.70となっており、牧野富太郎はそれに伍しているものと推測される。

牧野は旧制小学校中退という学歴から、東京帝大理科大学の植物

学教室では、土佐から植物に熱心な男が来たと便利に使われた一方、その後、矢田部良吉教授や松村任三助教らの排斥を受けるなど苦労を重ねた一方、池野誠一郎らの仲間の支えから助手を経て講師となり、博士号も取るなど長く植物学の研究に勤しめたのは幸いでもあった。最近、会員でもあり、『山岳』にも寄稿のある大場秀章・東大名誉教授が『牧野富太郎の植物愛』でこの間の事情を考察しているの、牧野富太郎自叙伝以外による情報から牧野の人物像を窺い知ることも必要である。

（資料映像委員会委員）

活動報告

図書委員会

第38回 図書交換会報告

さる5月20日、日本山岳会のルームにおいて図書交換会が開催された。2019年の年次晩餐会以

告

日本山岳会の各委員会、同好会の活動報告です。

降はコロナ禍の関係もあって開催できずにいたイベントである。

今回は東京新聞の旧『岳人』編集部が所持していた書籍と、故・水野勉会員のご遺族から寄贈された書籍（234冊。これらは一律1冊



104号室に並べられた書籍を見て申込み来場者

500円)、および図書室に新刊が入庫したため不要になった旧版のガイドブックなど(183冊。無料)、それに当日加えたものや雑誌もあり、約450冊が対象となった。並べられた書籍を見れば名著と言われるものや、格調高い書籍が多く、本から申込みを待つてますよ、と訴え掛けられているようにも感じた。

メールや郵送で事前に49人から延べ545冊に対して申込みがあった。当日の来場者は少なかったものの、熱心に書籍を見て申込み姿が見られた。それを集計し、申込み者が2人以上の書籍については全て厳正な抽選を行なった結果、ほぼ全部の書籍が購入され、購入

者への発送も24日に完了した。こうして読書好きの会員の元の良い本が廉価で届けられたのは、『岳人』編集部、故・水野会員のご遺族のご厚意のお陰であり、深く感謝申し上げます。

今回は抽選会の様子をzoomで視聴できる態勢としたこと、従来の抽選方法に加えてデジタル抽選も取り入れたことなど、新しい取り組みを行ない、効率化を図った。とはいえ集会所と104号室を使用したことで、書籍の運搬などは避けられなかったが、若い図書委員のパワーで無事終了することができた。年末の年次晩餐会でも開催する予定であり(晩餐会は図書交換会だけへの参加も可)、書籍の提供をはじめ、会員の皆さんにご協力をいただき、多くの会員に良い本をお届けできればと思う。若い会員に山岳書に興味を持ってもらう一助となることも期待したい。ちなみに、会報「山」では山岳書の名著を紹介するシリーズを掲載することとしており、山岳書関連のイベント開催も含め、多くの会員が山岳書に親しんでいただけるよう努めていきたいと考えている。

(荒井正人)

令和5年度(前期) 海外登山助成対象登山計画募集

〈海外登山助成委員会〉

公益社団法人日本山岳会では登山界の活性化を目指し、優れた海外登山計画に対して「海外登山基金」による助成を行なっています。困難を求めている挑戦、オリジナルな発想、斬新な切り口、独自のテーマのある計画など、ユニークな登山計画を支援したいと考えています。会員資格やパーティ編成などの条件は問いません。ぜひご応募ください。

・対象の山が未踏峰の場合、当該国政府発表の山名、標高を記入してください。

○申込み締切

2023年6月30日(当日消印有効)

○審査

2023年7月中に審査後、理事会で助成の有無を決定します。

○報告と記録掲載

助成対象となった登山隊は下山後、報告書を提出してください。また、会報「山」や機関誌「山岳」に掲載する記事にもご協力ください。

○問合せ・申込み先

日本山岳会事務局

☎03-3261-4433(月・

火・木10時〜、水・金13時〜、

第1・3・5土10時〜)

✉ jac-room@jac.or.jp

件名「海外登山助成対象登山計画送付」

〒102-0081 東京都千

代田区四番町5番4 サンビュ
ーハイツ四番町

②記入後、登山計画書と併せてメールもしくは郵便でお送りください。
・登山計画書には目的、対象となる山の名前、標高、位置、行程、メンバーの基本情報、予算など登山計画に必要な事項を網羅してください。

○申込み方法

①所定の様式をJAC事務局にご請求ください。

○対象

2023年8月1日〜2024年1月末に海外の山へ出発する登山隊

図書受入報告(2023年4月～5月)

著 者	書 名	頁/サイズ	発 行 者	発行年	寄贈/購入別
ローマン・ダイアル/ 村井理子(訳)	消えた冒険家	488p/19cm	亜紀書房	2023	出版社寄贈
徳仁親王	テムズとともに: 英国の二年間	223p/19cm	紀伊国屋書店	2023	著者寄贈
廣川健太郎	アルパインクライミング ルートガイド: 北アルプス編 特選87ルート	208p/26cm	山と溪谷社	2023	出版社寄贈
佐々木亨	詳しい地図で迷わず歩く 奥多摩・高尾500km: 増補改訂版	208p/21cm	山と溪谷社	2023	出版社寄贈
菊地敏之	我々はいかに「石」にかじりついてきたか(定本): 日本クライミング小史	352p/19cm	山と溪谷社	2023	出版社寄贈
坂本直行	雪原の足あと	288p/15cm	山と溪谷社	2023	出版社寄贈
中島慶二他(監修) 山と溪谷社(編)	アウトドア六法: 正しく自然を楽しみ、守るための法律	128p/21cm	山と溪谷社	2023	出版社寄贈
牧野 富太郎	牧野富太郎と、山 (ヤマケイ文庫)	256p/15cm	山と溪谷社	2023	出版社寄贈
中村富士美	「おかえり」と言える、その日まで: 山岳遭難捜索の現場から	160p/18cm	新潮社	2023	出版社寄贈
深田久彌	山岳紀行(新潮文庫 No.489)	320p/16cm	新潮社	1943	佐久間雅義氏 寄贈
田部重治	山に入る心(新潮文庫 No.346)	198p/17cm	新潮社	1938	佐久間雅義氏 寄贈
串田孫一	考える草: 美しい夢と思索のノート	167p/18cm	雲井書店	1956	佐久間雅義氏 寄贈
東京大学山の会(編)	山と友Ⅲ: 第一巻 山 東大スキー山岳部 百周年記念誌	471p/21cm	東京大学山の会	2023	発行者寄贈
東京大学山の会(編)	山と友Ⅲ: 第二巻 友 東大スキー山岳部 百周年記念誌	315p/21cm	東京大学山の会	2023	発行者寄贈
マーク・シノット/ 西川知佐(訳)	アレックス・オノルドのフリーソロ: The Impossible Climb	432p/21cm	東洋館出版社	2022	出版社寄贈
日本ハイキング 倶楽部(編)	東京百名山: 日本ハイキング倶楽部 創立九〇周年記念事業	116p/30cm	日本ハイキング 倶楽部	2023	発行者寄贈
菊地敏之	日本の岩場(改訂新版) (クライミング・ガイド・ブックス上巻)	160p/21cm	白山書房	2023	出版社寄贈
松澤 節夫	回想と空想: 松澤節夫 木口木版画集Ⅱ	59p/20cm	白山書房	2023	出版社寄贈
木下 こうえ/ 木下 さとみ	幻のユキヒョウ: 双子姉妹の標高4000m冒険記	192p/21cm	扶桑社	2023	出版社寄贈
明治大学体育会山岳部 炉辺会	炉辺第11号: 創部百周年記念号	530p/21cm	明大 炉辺会	2023	発行者寄贈
シマダ テルオ/ ボーラ バスネット	ネパールの栽培作物と山菜・飼料植物の用語集	328p/30cm	Jagadamba Press	2015	個人寄贈
加藤嘉晴(編)	ともに、あの頂へ: 加藤慶信 遺稿・追悼集	472p/21cm	加藤嘉晴(私家版)	2011	個人寄贈
田中康弘	マタギ 矛盾なき労働と食文化	176p/21cm	樺(えい)出版社	2009	個人寄贈
T. Robert/E. Henry	Tony Streather: Soldier and Mountaineer	143p/20cm	Upfront Publishing	2021	購入
K.Mala	Up the Mountains of India	232p/20cm	Hachette India	2022	購入
Haroojae Club (tr.)	Krzysztof Wielicki (ハングル版)	560p/24cm	Haroojae Club	2022	発行者寄贈
Haroojae Club (tr.)	60th Anniversary of the Himalaya Expedition (ハングル版)	440p/20cm	Haroojae Club	2022	発行者寄贈
Haroojae Club (tr.)	Vertical Mind (ハングル版)	316p/25cm	Haroojae Club	2022	発行者寄贈
D.Stefan (ed.)/ M.Reinhold (ed.)	M4 (ハングル版)	241p/32cm	Haroojae Club	2022	発行者寄贈
Haroojae Club (tr.)	Sangakumanga, Shosetu, Eiganokeihu (ハングル版)	312p/25cm	Haroojae Club	2023	発行者寄贈

会務報告

令和5年度第2回(5月度)理事会

議事録

日時 令和5年5月17日(水曜日)

19時00分

場所 zoom(オンライン) ルーム

ム

【出席者】古野会長、坂井・橋本各

副会長、柏・南久松・萩原

各常務理事、松原・松田・

清水・平川・川瀬・久保田・

長島各理事、佐野・黒川監

事

【欠席者】山本副会長、飯田理事

【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

1・令和5年度総会開催について承認した。(柏) (賛成13反対0)

2・令和5年度総会第1号議案(令和4年度事業報告案)について承認した。(柏) (賛成13反対0)

3・令和5年度総会第2号議案(令和4年度決算報告案)について承認した。(柏) (賛成13反対0)

4・令和5年度総会第3号議案(令和5・6年度役員案選任)について承認した。(柏) (賛成13反対0)

5・ウエストン祭および田部祭、木暮祭の助成金申請について承認した。(坂井) (賛成13反対0)

6・北海道支部支部長交代について承認した。(柏) (賛成13反対0)

7・岐阜支部支部長交代について承認した。(柏) (賛成13反対0)

8・関西支部支部長交代について承認した。(柏) (賛成13反対0)

9・北九州支部支部長交代について承認した。(柏) (賛成13反対0)

10・正会員10名、準会員4名の入会承認報告があった。(古野)

11・GW雪山天気予報報告があった。(柏)

12・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

13・カナディアン・ロッキーにおけるユースキャンプ2023仮計画書の説明があった。(松原)

14・その他

15・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

16・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

17・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

18・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

19・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

20・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

21・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

22・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

23・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

24・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

25・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

26・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

27・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

28・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

29・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

30・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

31・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

32・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

33・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

34・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

35・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

36・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

37・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

38・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

39・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

40・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

41・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

42・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

43・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

44・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

45・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

46・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

47・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

48・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

49・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

50・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

51・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

52・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

53・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

54・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

55・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

56・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

57・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

58・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

59・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

60・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

61・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

62・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

63・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

64・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

65・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

66・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

67・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

68・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

69・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

70・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

71・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

72・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

73・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

74・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

75・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

76・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

77・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

78・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

79・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

80・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

81・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

82・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

83・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

84・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

85・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

86・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

87・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

88・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

89・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

90・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

91・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

92・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

93・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

94・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

95・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

96・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

97・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

98・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

99・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

100・「山」5月号発行について報告があった。(節田)

ルーム日誌 5月

1日 記念事業委員会(山岳古道調査)

2日 スケッチクラブ

3日 財務改善部会 かつぱの会

4日 フォトクラブ

5日 山行委員会 休山会 山想倶楽部

6日 YOUTH CLUB委員

7日 図書委員会

8日 財務委員会 麗山会 沢登同好会Ⅱ バックカントリ

9日 同好会Ⅱ バックカントリ

10日 同好会Ⅱ バックカントリ

11日 同好会Ⅱ バックカントリ

12日 同好会Ⅱ バックカントリ

13日 同好会Ⅱ バックカントリ

14日 同好会Ⅱ バックカントリ

15日 同好会Ⅱ バックカントリ

16日 同好会Ⅱ バックカントリ

17日 同好会Ⅱ バックカントリ

18日 同好会Ⅱ バックカントリ

19日 同好会Ⅱ バックカントリ

20日 同好会Ⅱ バックカントリ

21日 同好会Ⅱ バックカントリ

22日 同好会Ⅱ バックカントリ

委員会

23日 00会 平日クラブ

24日 図書委員会 子どもと登山委員会

25日 YOUTH CLUB委員

26日 会(学生部) 山遊会

27日 総務委員会 記念事業委員

28日 会

29日 支部事業委員会

30日 理事会 総務委員会(説明会)

5月来室者 237名

5月来室者 237名

5月来室者 237名

5月来室者 237名

5月来室者 237名

5月来室者 237名

5月来室者 237名

5月来室者 237名

5月来室者 237名

5月来室者 237名

5月来室者 237名

5月来室者 237名

5月来室者 237名

5月来室者 237名

5月来室者 237名

5月来室者 237名

5月来室者 237名

5月来室者 237名

5月来室者 237名

5月来室者 237名

5月来室者 237名

5月来室者 237名

5月来室者 237名

(10370)
篠原英明(10697)
篠原義子(10698)
大澤雅彦(11153)千葉
若松庄三(11264)京都・滋賀
延島冬生(11297)
中祖博司(11475)関西
能田 成(12100)京都・滋賀
大山彰仁(12315)
山川万里子(12453)福岡
望月恭一(12612)
望月公子(12613)神奈川
磯上 隆(13406)
小柳奈津子(13415)静岡

加藤晴久(13977)
佐藤 弘(14411)広島
深田美好(14427)
毛利恵利子(15035)東海
氏川智皓(15897)
江島博之(16260)熊本
安田宏記(16402)
辛 眞談(16559)
財津正美(16692)東九州
竹内誉剛(16804)東海
青山智子(16833)
玉木美智子(16884)神奈川
小林光義(17010)
上市博子(A0318)東京多摩

INFORM

ATIN

インフォメーション

◆白馬岳から日本海へ《梅海新道》

山行委員会

北アルプス主脈から日本海に続く梅海新道は、一度は歩いてみたいコースです。全長40kmに及ぶ夏山縦走に挑戦してみませんか。昨年はキャンセル待ちが多数出たため再度行ないます。

日程 8月30日(水)～3日(日)
集合 30日(水) 白馬駅バス停6時40分(*バスタ新宿23時05分発安曇野・大町・白馬行き夜行バス「さわやか信州号」が便利)

行程 白馬駅⇨猿倉⇨白馬尻小屋⇨葱平⇨頂上宿舎⇨白馬山

歩程 30日⇨約6時間 31日⇨約7時間40分 1日⇨約8時間10分 2日⇨約10時間(健脚向き)
費用 5万円(ホテル1泊、山小屋代2泊、無人小屋1泊協力金、弁当代、タクシー代、保険料ほか)
定員 先着8名まで
申込み 7月5日～8月18日(金)までに、数見直宛 ☎090-7204-4668
✉sanako@jac.or.jp
*親不知観光ホテルに泊まらない方は事前にご連絡ください。親不知登山口の下山時間により入浴もあり。
*傷害保険加入のため、性別・生年月日を、また、参加者名簿作成のため会員番号、住所、緊急連絡先(続柄)、電話番号、携帯電話番号などをお知らせください。

寄附金および助成金などの受入報告(5月31日まで)

寄附者など	受入金額など (単位:千円)	寄附の目的、その他
松野 賢珠 会員	15	永年会員のための寄附金
匿名	20	山岳会事業

◆第66回高頭祭(同時開催第6回弥彦山たいまつ登山祭)のご案内

越後支部

主催 越後支部

日時 7月25日(火)午後より、日程は後述(小雨決行)

場所 新潟県弥彦村弥彦山大平園地・高頭仁兵衛翁寿像前

弥彦ロープウェイ山頂終点駅より徒歩約15分

内容 日本山岳会創設メンバーで、第2代会長を務めた高頭仁兵衛翁の遺徳を偲び顕彰する。参加者全員で献花と女

性陣による献酒のセレモニーや記念講演を行ない、会員間の山談義で交流を深める機会とします。

弥彦山たいまつ登山祭は、弥彦神社灯籠祭りの一環として弥彦山岳会主管で行なわれます。弥彦山頂奥の院から神社へ御神火を届けた後、祭りの花火が打ち上げられる雰囲気の中を、たいまつをかざして神社参道から街中行進へ繰り出します。

日本山岳会副会長・坂井広志様「日本山岳会120周年記念事業」引き継がれる山岳祭プロジェクトについて」

日程

14時Ⅱ弥彦山大平園地・高頭仁兵衛翁寿像前集合
14時30分Ⅱ開式宣言（支部長・来賓挨拶、献花・献酒・記念講演など） 15時30分Ⅱ閉式宣言（終了後大平園地休憩広場にて軽食・歓談） 16時Ⅱ大平園地より弥彦本山奥の院へ移動（徒歩約30分） 17時Ⅱ奥の院にて安全登山祈願祭 18時Ⅱたいまつ登山開始 19時30

分Ⅱ弥彦神社境内拝礼後、神社参道から弥彦街中へたいまつ行進 20時30分Ⅱ弥彦駅前にて解散

《注意Ⅰ》高頭祭は、自由参加で人数制限しませんが、たいまつ登山祭は健脚向け行事です。越後支部理事の弥彦山岳会・小林頼雄会長より、弥彦神社神事で弥彦村祭礼行事であり、7月5日までに参加申込みが必要で、参加人員を調整する場合もあります。

《注意Ⅱ》梅雨明け後の炎天下行事のため、飲料水・帽子・タオル・雨具などを各自持参ください。また服装や靴は、ハイキング程度で構いません。

問合せ先 越後支部事業委員長 小山一夫 H P 09052197432、

✉ nrwnj82848@yahoo.co.jp

◆日本山岳画協会展―創立86周年記念展覧会―

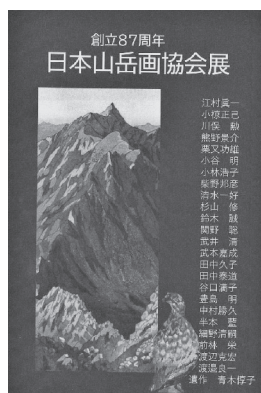
日時 7月2日(日)～8日(土) 11時

17時、初日は正午から、最終日は16時まで

会場 東京交通会館B1 ゴールドサロン(〒1000000

6 東京都千代田区有楽町 2-10-1 ☎03-3215-7933

問合せ 杉山 修 ☎09054404552



◆岩橋英遠・岩橋崇至展

昨年11月に亡くなった写真家・岩橋崇至氏(本会会員)の、生前から続く102回目の写真展。日本画家の父・英遠氏の作品展も同時に開催。

日時 8月5日(土)～27日(日) 10時

(18時(水曜日休館))

会場 相模原市民ギャラリー 〒

252-0302 神奈川県

相模原市中央区相模原1-

1-3 セレオ相模原4F

☎04277611262

交通 JR横浜線・相模原駅下車

(改札出てすぐ)

◆編集後記◆

●かねてから念願だった越前の平泉寺白山神社に行ってきました。司馬遼太郎が『街道をゆく』の中で「京都の苔寺の苔など、この境内にひろがる苔の規模と質からみれば、笑止なほどであった」と記していますが、亭々とそびえ参拝者を睥睨するかのとき巨杉の参道とともに、見事な苔の絨毯でした。

●かつて白山く別山く鳩ヶ湯のコースを歩いたことがありますが、白山越前禅定道は道が違っており、起点は、泰澄大師によって開かれたこの平泉寺です。今回は、せめてその入り口だけでも踏んでおきたいとの思いからの参拝でしたが、前日に訪れた一乗谷の朝倉氏遺跡ともども、その地に深く根付いている歴史の重みを感じさせられた越前の旅でした。(節田重節)

日本山岳会会報 山 937号

2023年(令和5年)6月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 古野 淳
編集人 節田重節
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社